

「私たちの宗祖親鸞聖人」

お話 玉光順正さん

それはどういうことかと言うと得道の人ということです。ゲバラという人はそれを具体的に言った。そういう言葉に出会った時、あ、そうだという感覚がある。法蔵菩薩の精神が具体的なところで今でも生きているのです。

そんな人は別にゲバラだけでなく、世の中にいっぱい居るんです。たとえば、外務省のラスプーチンと言われる佐藤優。同志社大学の神学部を出て外務省に入って、すごく勉強をしている人で、こういう言い方をしている

んです。「貧困が全く存在しない世界、絶対に戦争がない世界、これが私の言う大きな夢、すなわち究極的なものです。こういう夢を実現することに

満足を感じる、言い換えるならば大きなとてつもなく大きな夢がエゴとなる人がふえれば社会は強化されると私は考えます、とこういう言い方をしているんですね。貧困、戦争、差別の全く存在しない世界。これは何かと言うと六道で言う地獄餓鬼畜生ですね。地獄餓鬼畜生のない世界。これが私の言う大きな世界、すなわち究極的なものです。四十八願の最初、第一願にちゃんと揃とるんですね。こういう夢を実現することに満足を感じる。これは法蔵菩薩もそうでしょう。で、そのとてつもなく大きな夢がエゴとなるような…。

つまりエゴというものはみんな持つとる訳です。自分がこうなったらいいとか、そういう願いをみんな持つとる訳です。ところがそのエゴというのはこんなに大きな物ではない訳です。つまり、今、ここ、自分みたいなものです。今さえよければいい、ここさえよければいい、自分さえよければいい。同様なものをエゴイズムと言うんですね。しかし考えたら、こういうものがない世界というものをエゴとするようなことが不可能か？といえそうではないということです。それが願に生きるということです。私があつて、私が願いを持つというのが普通です。つまり私の中に願いがある。それはそうですね誰でも。ところが本願、とてつもなく大きな夢、は逆に願いがあつて、その願いによって私が成り立つ。

これが藤元先生の言葉で願において立つ我。私が願いという自分のもっている願いと聞こえますけれども、我というのはそういう意味ではなくてむしろその願いによって成り立つ主体性です。願によって生きる自己というのが、ここで言われている我であります。これは嘆仏偈でも書かれています、私たちは、生きる時にですね、自分の願いがあつて私がある。ところが願いというものによって私が成り立つということがあるんだ。これはもっと別の表現で言えば、仏教というものは教えを聞いて、その聞いた教えで自分がひっくり返されて、その教えを生きるという言い方をされることがあるんですが、要するに願を背負って生きるということです。曾我先生は「信に死し願に生きよ」と表現されとるんです。

そういうことが自分の生きるという事になった時に、具体的に例えば、ゲバラの言葉とか佐藤さんの言葉とかになる。

しかしある意味ではそれは永遠になりたないことかもしれない。仏教を学ぶという事はそれが始まったという事は終わらないことだけがその証拠なんです。終わりのない世界と和田先生がよくいわれましたが、終わらないことだけが始まった証拠。それは仏教を聞くということは、願いの中に自分があるということです。だからね、あの人よう熱心に聞きよったけど、卒業したんかいなということがあるんですが、卒業はないんです。それは時という事を考えるということで、時を救うということでもあるということです。

次にはここということ、どこに立つかということなんです。

村上春樹という作家が、エルサレム賞をとった時に、イスラエルで「ここに高くそびえる壁と、壁にぶつかるこわれてしまう卵があるとすると、私はいつでも卵の側に立つ。例えどんなに壁が正しくて卵が間違っているとしても、私は常に卵に寄り添います。何が正しくて、何が間違っているかについては、他の人が決めるでしょう。歴史が証明するのかもしれない。が、もし小説家が、どんな理由であれ、壁の側に立った作品を世に送り出したとしたら、その作品にはどんな価値があるのでしょうか。」と演説しました。(つづく)

